平成26年度　やまぐち教育フォーラム分科会資料

ＡＦＰＹの５つの視点を生かした学級づくり・授業づくり

―ＡＦＰＹの源流を訪ねてー

やまぐち総合教育支援センター

　ふれあい教育センター

　子どもと親のサポートセンター

　　部　長　　藤　村　寿

１　はじめに

　ＡＦＰＹ研修のたびに思うことは、「今、ここで」出会えてよかったということ、ともに同じ時間を過ごせてよかったということです。今、ここにいない人と時間を共有することはできません。

　私にとって、教職生活の初期に生徒を喪ったという経験がその後に大きく影響しています。30年以上たっても、その生徒のことを忘れることはありません。彼が生ききれなかった分、後輩達には生き生きと生きてほしい。そう願ってきました。いじめられて学級からはじきだされた子ども達、学校に来ていない子ども達は一緒に活動することはできません。また、同じ場所にいても参加できないこともあります。何をしていいのかわからない。ほかの人と意思疎通ができない。ルールがよくわからない。恥ずかしい。お腹が痛い。様々な理由から参加できないこともよくあります。ＡＦＰＹの道のりは、どうすれば全員が楽しく参加できるのかという答えを探す旅でもありました。今回のセッションは教員生活34年、山口ＯＢＳの25年の歴史、そしてＡＦＰＹ誕生から12年の集大成になるのかもしれません。

　2003年2月、旧山口県教育研修所の研究発表会で「いつでもどこでもだれでもできる仲間づくりに関する研究」を発表し、その副題「Adventure　Friendship　Program　in Yamaguchi　の活用をめざして」の中で初めて「ＡＦＰＹ」という言葉を使いました。研究発表から12年が過ぎ、初任者研修や10年経験者研修等の教員研修をはじめ、社会教育指導者を含めて様々な研修会で紹介され、現在では県内の多くの指導者がＡＦＰＹという言葉を知っています。実際に子ども達を対象に、いくつかのアクティビティを実施したという方も少なくないでしょう。

　一方で、「ＡＦＰＹをやっても効果がない」という声もしばしば聞こえてきます。この場合、「ＡＦＰＹ」と言っているのはアクティビティのことであり、「効果がない」とは集団の人間関係に改善が見られないという意味であると推測されます。アクティビティを習得し、効果的に実施できるようになるためにはかなりの努力を要することから、多くの教員がＡＦＰＹのアクティビティを使うことに自信がなく、消極的になっています。

　山口県が独自に切り拓いてきたＯＢＳの教育手法を活用した青少年教育の伝統を今後の山口県教育にどう生かすことができるのか。今後は「ＡＦＰＹの５つの視点」を活用した学級づくり、授業づくり、学校づくりを進めていきたいと思っています。

２　ＡＦＰＹの源流

　ＡＦＰＹの源流としては、次の３つが考えられます。

1. ＯＢＳとＰＡ
2. チャレンジ＆クエスト
3. 山口県教育

（１）ＯＢＳとＰＡ

世界的な野外教育機関であるＯＢＳ（アウトワードバウンド・スクール）では28日間のコースが標準とされています。その目的は、個人とグループの成長です。日常生活から離れて野外での共同生活を営む中で、自信を回復し、人間関係について学ぶことに重点が置かれています。グループでの山歩き（バックパッキング）で心身ともに疲れ切る頃に「ソロ」という活動が設定されます。活動と言っても、活動は何もなくて、決められた場所で一人で過ごすのです。２日から３日の間、その場所を離れてはいけません。時計も本もテントもなく、タープと寝袋だけで過ごします。一人になってグループから離れることで心身を癒しながら、仲間や家族についてとらえ直す時間となるよう、自分や家族に手紙を書かせるなど、認知・行動療法等が援用されています。

長期間にわたる自然の中での集団生活が自己意識の向上をもたらすことが明らかにされています。10年間にわたって、ＯＢＳのコースの教育効果の測定を行ったのがProject Adventure(PA)というアメリカ連邦教育局の調査研究事業です。事業終了後に同名の団体が設立され、ＯＢＳのコースと同じ効果を生み出すアクティビティを開発し、指導者の養成や出版、ロープコースの設置を行っています。我が国におけるＰＡの歴史は1995年に始まります。「野外教育全国フォーラム」が開催され、野外教育学会が設立される中、ＰＡＪ（プロジェクト・アドベンチャー・ジャパン）が発足しました。

　同じ頃、山口県はハリケーン・アイランドＯＢＳ（アメリカ・メーン州）に研修生を派遣し、ＯＢＳの教育手法を活用したクエスト・キャンプを開始しました。

　また、2002年には、国立山口徳地青少年自然の家にＰＡの専用施設（エレメント）が設置され、それを使った体験活動を希望する学校等の団体が出てきました。例えば、2泊3日で小学校5年生の宿泊学習を行う際にロープコースを体験させ、グループ内の関係づくりを進めたいと考えました。主催者である学校と専用施設を有する自然の家と外部指導者が三位一体となって、新しい体験活動を提供する試みが始まりました。その後、十種ケ峰青少年自然の家（旧野外活動センター）にもＰＡの専用施設「森のチャレンジコース」が完成し、現在でも年間を通して多くの学校や団体がロープコースを体験しています。

1. チャレンジ＆クエスト

1990年8月15日、第1回の指導者講習会が萩青年の家で開講し、山口県におけるチャレンジ、クエストの歴史がスタートしました。指導者はハリケーン・アイランドＯＢＳのインストラクター、コースの指導は英語を基本に実施されました。指導者養成から始めた点が山口県の取組の大きな特徴であり、事業が継続的に教育効果を維持する決め手になっています。

その後、山口県教育委員会は約20年にわたり、「心の冒険・サマースクール」（青少年自然体験活動推進事業）を実施し、現在までに約2000人の青少年が参加しています。本事業の中核であるチャレンジプログラム（小学5・6年）とクエストプログラム（中・高校生）はＯＢＳの教育手法を活用した長期キャンプです。夏休みの1週間程度集団生活を送りながら、すべての食料や装備を背負って移動します。地図とコンパスを頼りにグループで協力して目的地をめざします。フル装備で道がない場所を行きますから、途中で前進できなくなるという事態が頻発します。自然にそうなるように、インストラクターは荷物の重さをコントロールするのです。精根尽き果てそうになった時、どうやってチームとして前進するのか。話し合いの中でお互いのつらさを思いやり、励ましあうことはできる。しかし、なり代わることはできないという哲学的な洞察に至ります。到着したら、いくらきつくても自分達でテントを張って、食事の準備をしなければなりません。雨が降れば、即座に対応しなければ、体も荷物もずぶ濡れになってしまいます。自然の厳しさの中で、子ども達は仲間と一緒に一つ一つ困難を乗り越え、次第に「自分でもできる」という自信を持つことができるようになります。

心の冒険・サマースクールの安全な実施のために、多くの指導者が協力し、指導力向上のために努力しています。10日間の指導者養成コースもありますので、若手・中堅教員のみなさんには、ぜひ全国屈指の取組に参加していただきたいと思います。本格的な長期移動キャンプの体験は指導者自身の生き方が変わるぐらいの大きなインパクトをもたらすことでしょう。

1. 山口県教育の伝統

山口県教育の伝統そのものがＡＦＰＹの源流であるということもできます。　ＮＨＫ大河ドラマ「花燃ゆ」がスタートしました。明治維新を牽引した人材を多く生み出した吉田松陰と松下村塾はあまりにも有名です。吉田松陰は門下生一人一人の特性を見抜き、自由な雰囲気の中で個性豊かな人材をのびのびと育てる教育を行ったことで知られています。

また、山口県教育は青少年自然体験活動の分野でも全国をリードしてきました。岩城山と秋吉台の宿泊訓練所は全国に先駆けて昭和30年代に整備され、国立青年の家や少年自然の家等はその後に作られています。キャンプやレクリエーション、スキー、サイクリング、オリエンテーション等の分野でも、多くの指導者を生み出してきました。

　現在、山口県の公立小中学校の80％以上がコミュニティ・スクールに移行し、「地域教育力日本一」をめざしています。地域とともにある学校づくりが進み、新たな伝統が今から始まっていきます。保護者や地域の方々と様々なチャレンジをしていくことにより、強い絆が生まれることが期待できます。現実の課題に取り組む前段階として、アクティビティを活用して人間関係づくりをすることも可能です。

ＡＦＰＹの5つの視点と言っても、特に新しいことではありません。我々の先輩方がずっと大切にしてきた暗黙知を現代風にまとめ、あえて言語化しただけのことです。山口県教育が営々と築き上げてきた伝統を引き継ぐために、5つの視点が活用されることを願っています。

３　ＡＦＰＹのアクティビティ

1. 基本的な考え方

ＡＦＰＹのアクティビティというのは、ＰＡのものだけではありません。昔の遊びからレクリエーションとして使われているものまで何でもありです。子ども達のために使えるものは何でも使うつもりでやってきました。

アクティビティに決まったねらいはありません。それはハサミやパソコンと同じように単なるツールにすぎません。いいハサミや悪いハサミがないのと同じように、いいアクティビティも悪いアクティビティもないのです。効果があるかないかは指導者次第です。大切なことは指導者がいつ、どこで、だれを対象に何の目的でどのように実施するかです。アクティビティのねらいは指導者自身が決めます。指導者の責任において実施していただきたいものです。

　幾度となく徳地や徳佐に通う中で、様々なグループに出会いました。小学生から大人まで参加者の年齢も様々、学校から子ども会やＰＴＡ、指導者まで所属団体も様々でした。時には参加者と一緒になって感動し、時にはまったく反応がなく落ち込みました。指導者として加わった仲間も本当に手探りで、真剣に取り組みました。事前にアセスメントや打合せをし、活動メニューを厳密に作成し、実施後の振り返りも主催者と一緒に時間を十分にかけて行いました。

　しばらくして気づいたことがあります。徳地や徳佐での感動や失敗を含めた振り返りがその後の子ども達の学校生活にどう生かされているのかという視点から考えてみると、多くの場合は外部指導者による一発勝負でしかなく、単に「学校外で楽しい活動ができてよかったね」で終わっていました。

　何のために学校外で体験活動を実施するのかという目標が明確になっていなくて、とりあえず「ＡＦＰＹをさせたら人間関係がよくなる」という誤解があったのではないでしょうか。ですから、我々指導者としては、快く指導を引き受けながらも、まるで賽の河原を積むような徒労感に襲われていました。言い換えれば、体験活動の効果が次につながっていかないことへの落胆がありました。

1. 分類

　ＡＦＰＹのアクティビティは次の５種類に分類することができます。

* 1. 知り合うための活動（Ａ）

参加者が名前を覚えたり、お互いについてよく知るための活動です。

* 1. 緊張をほぐすための活動（Ｂ）

初めてのグループでは指導者も含めて緊張感が漂います。そこで、おにごっこなどの活動によって気持ちをリラックスさせていきます。

* 1. 意思疎通を図るための活動（Ｃ）

目隠し鬼ごっこなど目をつぶる活動では、パートナーの言葉かけによって安全に課題を達成することができます。

* 1. 信頼関係をつくるための活動（Ｄ）

③と重なる部分もありますが、いわゆるトラスト系の活動はハイリスクなものもありますので、ＰＡの講習会を受けられることをお勧めします。

* 1. 課題解決をめざす活動（Ｅ）

スタンドアップなど参加者全員でのチャレンジの場合、ハードルが高いほど達成感も大きくなります。

　どのアクティビティがＡ～Ｅのどの分類に入るかは決まっていません。人によって、またそのアクティビティを使う条件によって変わってきます。分類は指導者が決めるということです。

1. 組立

　アクティビティを分類するのは、ねらいの達成に向けて組み合わせるためです。分類することが目的ではなく、ねらいに応じてどの順番でどのアクティビティを行うか。一つ一つのアクティビティにねらいがあり、活動全体としてのねらいに迫っていくのです。一つや二つのアクティビティを実施したからといって、人間関係がよくなるわけがありません。日頃の人間関係を考えればわかることでしょう。それなのに、なぜかアクティビティに目を奪われて、条件を考慮せずに思いつきでやってみる。そして、うまくいかないばかりか、余計にこじれたり、けんかになったりする。その1時間で子ども達に伝えたいこと（ねらい）が指導者の側にあり、そのためには初めに何をやり、次に何をやり、最後に何をするという計画が必要です。そして、その1時間は年間の計画の中でどのような位置づけになっているのか。

　一つ一つの授業には必ず伝えたいことや教えたいことがあります。それを伝えるために、最初の説明や発問はどうして、課題をどう設定して学習活動をさせるかという授業計画を立てるでしょう。すべての教員が毎日数時間の授業をしています。授業にはねらいがあって、その達成に向けて学習活動を組み合わせます。1時間の授業は単元の中の、単元は年間計画の中に位置付けられているはずです。ＡＦＰＹのアクティビティもこれとまったく同じです。ＡＦＰＹとは授業であると言っているのはこういう意味です。

　アクティビティで提示される課題は現実の課題ではありません。アクティビティは現実のシミュレーションです。現実ではないので、何回でも失敗することができます。何回でも挑戦することができます。試行錯誤を通して、課題解決に向けてどのように話し合い、合意形成をしていくのか。学んだことを日常生活の中で生かしていくことができます。

　「アウトワードバウンド」とは、出港準備完了を意味しています。コースの中で学んだことを、一人一人の参加者が日常生活の中で生かしてほしい。コースを終えることが目的ではないのです。学校も学びの場であり、社会人になるための練習の場です。生徒たちは教科の学習だけではなく、人間関係についても失敗を繰り返しながら学んでいくのです。

４　ＡＦＰＹの５つの視点

　「ＡＦＰＹ入門―やまぐちふれあいプログラムの理論と実践―」（2004年）の中で、以下のような指導原理を示しました。

　・グループチャレンジによる課題解決

　・みんなが楽しい

　・自己決定と自己責任

　・暗喩（メタファー）の活用

　・仕掛けて待つ

　・勝敗、順位をつけない

　・全員参加

アクティビティを行う際の留意点や心構えをまとめたものです。この指導原理をもとに新たに整理したものが５つの視点です。

　ＡＦＰＹのアクティビティは、なぜこんなに楽しいのか。グループ・セッションは生き物ですから、うまくいくこともあるし、いかないこともあります。うまくいくためにはどのような要素が必要なのかを考えました。学級づくりや授業づくりの理論や手法は山のようにあります。教科の専門性ももちろん大切です。５つの視点はすべての教育活動のベースとなるものです。コンピュータ上に基本ソフトがないとアプリケーションソフトが動かないのと似ています。シンプルで、当たり前のことでも、実現するのはなかなか難しいが、実現しなければならないことを５つにまとめたものです。

1. ＰＤＣＡサイクル

　ＰＤＣＡサイクルはエドワード・デミングが品質管理の方法として提唱したものです。アメリカでは受け入れられず、我が国における戦後の復興とものづくりに威力を発揮しました。今でもデミング賞が存在し、国内の主要な企業の多くが受賞しています。もともとは工業製品の品質を向上させるために使われた手法でしたが、ドラッカーの組織マネジメントとともに、公的機関である学校にもその考え方が導入されるようになりました。知的労働者が社会を支える現代社会においては、病院やオーケストラのように専門家集団を組織として動かすことの重要性を説いています。

　Ｐ（計画）、Ｄ（実行）、Ｃ（評価）、Ａ（改善）のサイクルによって向上していくというモデルは個人から組織まであらゆるものに適用できると思います。学校評価をもとに学校は次年度の教育目標を検討しますし、個人目標も前年度の振り返りに基づいて行われます。各教科には年間計画がありますし、一つ一つの授業の中にもこのサイクルが生きているはずです。

　いちいち「評価します」と言わなくても、活動全体のねらいが明確であれば、達成できたかどうかは一目瞭然です。ねらいと評価の項目が異なる指導案を見かけますが、私は当然同じものになるはずだと考えています。

1. 安心・安全

　授業計画だけで授業は成り立つのでしょうか。これまでにもしばしば、完璧な学習指導案が準備してあっても、授業がうまく成立していないという場面を見てきました。教師の発問に対する反応は悪くないのです。ただ、他の生徒の発言を遮る生徒や相手の意見を聞いていない生徒、教師に暴言を吐く生徒等が放置されている。あるいは、教師自身が一方的な指導に終始して、生徒の反応を無視する、威圧する、ばかにするという教室の状況では、生徒一人ひとりが安心して授業に集中することはできません。いつ、だれから攻撃されるかわからないからです。教室の中が騒然としていても平気で授業を進めるのではなく、生徒全員が安心してそこにいられる環境が必要です。そのためには、お互いの人権意識や道徳的な価値に反することに関しては、小さなことでもその都度指導していかなくてはなりません。小さな場面を見逃すことが大きなほころびにつながっていくのです。一人一人を大切にする姿勢を教師全員が毎日毎回の授業の中で見せ続けなければなりません。

　安全と言えば、生徒にとっては何もしないのが一番安全です。しかし、安全であることが目的ではなくて、新たな目標に向かってチャレンジしたり、試行錯誤を繰り返したりするための条件として安全な環境が求められるのです。成長するためには一定のリスクを冒さなければなりません。エリクソンの発達段階説を見るまでもなく、人は常にリスクを負って成長していくものです。いつ崩れるかわからない足場から思い切ってジャンプすることはできません。下にクッションがあることがわかっているからこそ、思い切ってジャンプできるのです。ちなみに、ロープコースは非常に危険だと思われていますが、実は他のスポーツに比べて事故率が極めて低いのです。

1. ルール

　学級が集団生活の場である以上、お互いの安全を守るために何らかのルールが必要です。憲法上の基本的人権も無制限というわけではなく、「公共の福祉」によって制限される場合があります。各人が無制限に好き勝手なことをすると必ずだれかが我慢したり、被害を被ったりすることになります。全員が楽しく充実した学校生活を送るためには、共通のルールを守らなくてはなりません。この場合、ルールの必要性について全員が納得していることが重要です。一人一人の意見の違いは尊重されるべきですが、集団が一定の方向に成長していくためには、学級全体の合意形成が重要になります。

　また、教師が授業の開始時刻や終了時刻を守ることも大切なことです。「人を大切にする、ものを大切にする、時を大切にする」ことを教師が実践することにより、生徒達に身を持ってその重要性を知らせることができます。

　野球やラグビー等スポーツのルールは毎年常に修正されています。テレビ観戦している分にはあまり関係ありませんが、実はかなり細かくルール変更がなされます。学級のルール（学習規律等）や学校のルール（校則等）も実態に応じて細かく修正・改善していくべきものです。ＰＤＣＡサイクルが回っていれば、関係者にとって納得できるルールとなり、それを守る強い動機づけになります。

1. コミュニケーション

　コミュニケーション力の育成が課題になっています。「伝え合う力」を育てようと言われ始めたのは、長崎県の小学生による同級生刺殺事件が発端でした。道徳の教科化の背景には学校内でのいじめやそれに伴う自殺事案の発生があります。

コミュニケーション力を育てるために大事なことは、必然性です。一人で考えて答えがわかる間は人に相談したり、話し合ったりする必要もないでしょう。ちょっと自信がないとか、考えるヒントがほしいという時に、他の生徒と話をさせると盛り上がります。「やっぱり自分が考えたとおりだ」となったり、「あ、そういうことか」と感心したりするのです。ひとりでは解決できない課題が突き付けられ、他の生徒とともに考える時に意思疎通が必要になってきます。

　いじめや不登校の未然防止の観点から言えば、仲間に入れることが最も大事なことに思われます。だれかが「一緒に遊ぼう」とか、「一緒にやろう」とか言ってくれれば、仲間に入ることができます。いじめも不登校もいつどこにでもだれにでも起きる可能性がある。主客が逆転する可能性があると考えれば、常に孤立者を生まない環境づくりが必要です。学習活動を行うグループをつくる際に、全体に目を配り、全員が参加できているかを生徒一人一人が気にしているようであれば、いじめは生まれないでしょう。

1. 達成感

　設定された課題に対してトライ・アンド・エラーを繰り返し、最後には正解にたどり着く。なかなか正解にたどり着くことができなくて、グループで話し合いを繰り返し、解法を考え、やってみる。そのプロセスを繰り返せば繰り返すほど、課題を達成した時の感動は大きいものとなります。ただし、基礎的事項を習得する時間を抜きにすることはできません。既習事項をもとに話し合いを重ねてどうにかクリアできる程度の課題を設定します。課題が簡単すぎると達成感は得られません。課題が難しすぎるとモチベーションが下がってしまいます。対象となる生徒に適したレベルの課題設定が求められます。同じ内容の授業であっても、学級が違えば生徒も異なるわけで、常に課題設定の工夫を重ねることです。ここでもＰＤＣＡサイクルが回っていなくてはなりません。

　はやぶさによる小惑星探査や火星探査計画をあげるまでもなく、人類はさまざまなことに興味を抱き、自ら追及していく力を本来もっています。学校で習うことは大人にとっては既習事項ですが、学ぶ瞬間の子どもにとっては新たな発見なのです。ですから、仲間とともに課題を達成する喜びをたくさん味わわせたいものです。ただし、基礎的な知識は教え込まなければいけません。１+１を自然に子どもが学ぶことはほとんど期待できません。あくまで、基本的なことは覚えさせた後で、それを使ってワンランク上の課題に挑戦する場を保障していきたいものです。

５　ＡＦＰＹの可能性

1. 学級づくり

現在、山口県の教育界は大量退職・大量採用の時代に入っています。多くのベテランが教職を去り、新たに多くの新人が採用されています。この新人達にどのように山口県教育の伝統を引き継いでいくのかが大きな課題となっています。学級づくりでは、学級集団の人間関係や規範意識等を年間を通して育てていくための計画が重要です。特別活動の中の学級活動や道徳、各教科を組み合わせて、どのような学級にしたいのか。担任が生徒とともに明確なビジョンを描き、一日一日を積み重ねていくことが大切です。

例えば、特別支援教育において専門性を持った教員は限られています。しかし、同じ教員が同じ職場に長くいることは望ましいことではありません。採用から着実に人材育成を行っていく研修のしくみを考えていく必要があります。一方で、40代、50代が学級づくりや授業づくりで苦労しているという現実もあります。今の時代の子ども達にマッチした指導方法を模索せずに従来のやり方だけに頼っているとうまくいかないことも多いのです。ですから、単に伝統を引き継ぐだけではなく、新たな工夫を追加しないといけない事態となっています。

毎年、いじめ、不登校、暴力行為等の全国調査が行われています。いじめについては、大津市の事件を契機としていじめ防止対策推進法が施行されました。いじめ防止対策方針のもと、関係者がやらなければならないことが法律で定められました。国立教育政策研究所は「いじめのない学校づくり」というリーフレットで、ＰＤＣＡサイクルによるいじめ対策の日常的な改善を提案しています。また、「不登校・長期欠席を減らそうとしている教育委員会に役立つ施策に関するＱ＆Ａ」では、不登校を減らすためには、新たな不登校をつくらないことが近道であることから、市町村教育委員会単位で学級づくりや授業づくりに取り組むことを提案しています。一旦、不登校の状態になると再登校までの道のりが平坦でないことは日々の相談活動の中で実感しています。

長くかかわった不登校の生徒が「１週間以内に学校に行かせた方がいいですよ」と言ったことがあります。1週間以上欠席すると、必ず周囲からその理由を聞かれる。答えるのが難しくなってだんだんと欠席が重なっていくと言うのです。だから、1週間以内に対策を考えた方がいいと。学級が本当に安心できる安全な場所であったなら、その学級に行きたくないと感じる子どもがいるでしょうか。教室が安全ではないから行けないのではないでしょうか。

センターでは本年度、「人間関係に視点を当てた学級づくり入門研修講座」を新たに開設しました。ＡＦＰＹのアクティビティや5つの視点を含めて、どのように学級づくりを進めていけばいいのかを参加者と一緒に考えています。

1. 授業づくり

　いじめ、不登校、暴力行為等の究極の未然防止策は授業改善です。子ども達は昼間のほとんどを学校で過ごします。学校生活のほとんどは授業時間が占めています。ですから、授業に参加できて楽しければ、学校生活全体もきっと楽しくなるでしょう。

　しかし、生徒指導上の課題が多い学校では、授業の工夫をする余裕がありません。教材研究や授業準備をする時間がとれないため、ぶっつけ本番のような授業が多くなりがちです。

　授業評価シート（よい授業づくりのために）を作成しました。５つの視点を小項目に落としたものです。毎時間の授業後に授業者自身が振り返ることができます。授業研究の時間や研修の時間を別に取ることは難しいので、手の空いた教員が１人参観することが前提です。授業者以外の参観者は「他」の欄にチェックを入れます。そして、授業者と２人で見比べます。両者がチェックした項目はＯＫです。１人だけがチェックした項目があれば、なぜ認識の違いがあるのかを話し合うことで、次の時間に向けて授業改善の手立てが見つかるはずです。小さなことでいいのです。それが毎時間、毎日積み重なれば大きな改善につながっていきます。

　山口市教育委員会は２年間にわたってＡＦＰＹの５つの視点に基づいて市内の全小中学校で授業改善に取り組み、「５つの視点で授業をつくる～ＡＦＰＹで変わる子どもと授業～」にまとめています。全国初の先進的な取組であり、今後さらに広がっていくことを期待しています。

知識基盤社会において、ＯＥＣＤが提唱するキー・コンピテンシー（鍵概念）は知識の活用力です。全国学力・学習状況調査のＢ問題は活用力を問うものです。一方的な知識伝達と蓄積ではなく、次々に生まれてくる新たな情報を活用して課題を解決していく力が求められているのです。

　2003年に初めてのＰＩＳＡ（ＯＥＣＤによる世界的な学力調査）が実施され、「ＰＩＳＡショック」が我が国を襲いました。ゆとり教育が批判され、全国学力・学習状況調査が開始されました。その後、学習指導要領が改訂され、全国的に子どもの学力が向上しています。そして、次回の改訂の目玉となるのが、「アクティブ・ラーニング」です。従来の学習指導要領では学習内容が提示されてきましたが、初めて国が指導方法を提示することになります。

　2010年4月、ＮＨＫ教育テレビでアメリカ・ハーバード大学のマイケル・サンデル教授の正義をテーマとする「白熱教室」が放送されました。それまでの一方的な講義形式から、学生達との間に議論を交わしながら進めていく双方向的な授業が大きな話題となりました。この試みがアクティブ・ラーニングの着想に大きな影響を与えていると思われます。

　授業づくりは1回1回の授業の積み重ねです。時々の研究授業も大事ですが、ＡＦＰＹの5つの視点を頭に置いて、すべての教員が一つの一つの授業を振り返り、改善していくことが生徒の成長つながると確信しています。

1. 学校づくり

　一人ひとりの教職員ができることは限られています。学校教育を巡る課題は山積し、教職員の病気休職が他の業種と比較しても非常に多くなっています。従来の道徳教育や特別支援教育をはじめ、いじめや学校安全等についても学校全体で取り組むことが求められています。

　組織としての学校が目標をもって教育活動を行い、学校評価に基づいて改善を図っていくという組織マネジメントの考え方が定着しつつあります。また、登下校の安全確保等学校だけでは解決できない課題に地域とともに取り組むコミュニティ・スクールの導入も進んでいます。

　学校経営や学校づくりというと管理職が考えればいいと思いがちです。しかし、これからの学校ではすべての教職員が学校全体の動きを見ながら連動する、現代サッカーのような組織づくりが求められています。スター選手は必要ない。カリスマも必要ない。迅速にチームで考え、だれでも同じようにできるシステムをつくることが大切です。

例えば、中学校のある学級で「起立してから発言する」というルールを徹底させようとすれば、その学級で教える各教科の担任が共通理解する必要があります。少なくとも学年単位で共通理解をもとに実行しないと教育効果はあがらないでしょう。小学校でも教科担任制の試みが進んでいますが、複数の目で一人ひとりの生徒や学級集団を見ながら、指導の改善を図っていくことが重要です。

６　おわりに

1. 代わりはいない

　40歳を過ぎてからジョギングをはじめ、仲間とともに青島・太平洋マラソンや指宿菜の花マラソンに挑戦し、最近の６年間は年間2000ｋｍをクリアしてきました。そのつけが一気にきて、「脊柱管狭窄症」の診断が出ました。背骨を通る神経が圧迫されて足腰にしびれが出ています。このような状態になって初めて普通に歩けることのありがたさを感じることができます。何事もバランスが大事だと実感しています。気になっているのは、この背骨の症状がジョギングのせいだけではなく、ロープコースのビレイ（チャレンジャーをロープで支えること）が影響しているのではないかということです。徳佐や徳地で何度となく指導を重ねる中でダメージが蓄積されたのかもしれません。ロープコースの指導をされるみなさん、身体への負担が過重にならないよう気を付けてください。もうすぐ、再生医療の進歩によって背骨を取り換えることが可能になるかもしれませんが、当面の間は代わりがききません。

　当たり前のことですが、一人の人は一人しかいません。代わりはいません。教育相談は一人の相談者を大切にすることから始まります。学校に行けない苦しさ、悲しさをわかろうとする、感じ取ろうとする。そのために相談者の話に耳を傾ける。傾聴がとても大事な作業になります。簡単に心を開くことはできないので、１回50分の中で少しずつです。継続してセンターに来ることで、やりたいことも見えてきます。親身になればなるほど、代わってやってあげたくなります。しかし、その人の人生を代わることはできません。あくまでそばで応援することしかできないのです。子どもに対する教員、保護者に対する教員、相談者に対するセンターの立場も同じです。代わることはできない。しかし、一緒に悩んだり、考えたりすることはできます。

　（２）総合的な学級づくり推進プラン

　多くのベテランにとって当たり前のことも、新人に伝えようとしなければ伝わることはありません。ベテランの背中を見て学ぶということはもちろんありますが、早く多くの人に伝える場合、伝えたいことを整理して言葉にしなければ、最低限のことを効率よく伝えることはできません。

ＡＦＰＹのアクティビティは学級づくりのうち、人間関係づくりの部分で貢献してきました。そのことは今後も変わることはありません。

一方で、年間を通して学級づくりをどのように進めるのかをまとめたものが必要ではないでしょうか。例えば、島根県教育センターは共同研究「学級集団づくりへの取組」の成果物として「学級集団づくり魅力ガイドブック」を作成しています。

　「総合的な学級づくり推進プラン」（仮称）のようなものの中に、特別活動の基本的な考え方や年間指導計画の作成方法、人間関係づくり、集団づくりの理論や技法が含まれるのでしょう。

　また、ＡＦＰＹの５つの視点の有効性について、何らかの検証が必要となります。効果検証によって、さらにバージョンアップできると思います。

（３）何でもない時に

　平成26年７月に実施された内閣府政策統括官の「小学生・中学生の意識に関する調査報告書」によれば、平成18年と比べて小中学生の生活環境は改善しています。

　例えば、「ふだんの生活について」（第１節）では、「あなたのほっとできる場所はどこですか」との問いに「家」と答えた者の割合は、18年の86.0％が26年には88.6％と2.6ポイント増加している。また、「学校生活について」（第２節）では、「学校の授業がよくわかっている」と答えた者の割合は、18年の84.8％が26年には92.3％と7.5ポイント増加している。「友達付き合いについて」では、「何でも話せる友達がいる」と答えた者の割合は、18年の84.4％が26年には90.2％と5.8ポイント増加している。「価値観」（第４節）では、「人の役に立つ人間になりたい」と答えた者の割合は、18年の92.1％が26年には97.5％と5.4ポイント増加しています。

　日本の社会全体の努力によって、子ども達にとって好ましい家庭環境や学習環境が整いつつあることがわかります。また、社会貢献の意識も高まっています。自信を持てない時期を乗り越えて、子ども達が「自分もやれる」と思えるようになってきているのでしょう。

　ＡＦＰＹの５つの視点は学級づくり、授業づくり、学校づくりだけではなく、給食や清掃の時間をはじめあらゆる場面で有効です。すべての集団活動における基盤になる理念と言ってもいいでしょう。

校内で何か事件が起きた時に対応するのは大きな労力を要します。正常に戻すのに多くの時間を費やさなくてはなりません。学校の秩序は一瞬で崩れますが、立て直すためには長い時間が必要です。大事なのは何でもない時にどうするかです。落ち着いている状態の時でも常にＰＤＣＡサイクルを意識して、自ら課題を見つけ、目標設定をして、学校全体が進んでいけば、教員も生徒達も達成感が得られ、安定した状態が維持できます。生活習慣も学習習慣も毎日の積み重ねです。当たり前のことをいかに続けることができるか。時には新しいことに挑戦することができるかが鍵になります。

＜参考文献＞

１　国立教育政策研究所　いじめのない学校づくり　2014年

２　国立教育政策研究所　不登校・長期欠席を減らそうとしている教育委員会に役立つ施策に関するＱ＆Ａ　2012年

３　藤村　寿　　ＡＦＰＹ入門―やまぐちふれあいプログラムの理論と実践―2004年

４　山口市教育委員会　　５つの視点で授業をつくる～ＡＦＰＹで変わる子どもと授業～　　明治図書　2014年

５　武田修三郎　　デミングの組織論　　東洋経済新報社　　2002年

６　Ｐ．Ｆ．ドラッカー　　マネジメント　　ダイヤモンド社　　2001年

７　Ｐ．Ｆ．ドラッカー　　経営の真髄［上・下］　ダイヤモンド社　2012年

８　マーシャル・ゴールドスミス　　[コーチングの神様が教える「できる人」の法則](http://www.amazon.co.jp/%E3%82%B3%E3%83%BC%E3%83%81%E3%83%B3%E3%82%B0%E3%81%AE%E7%A5%9E%E6%A7%98%E3%81%8C%E6%95%99%E3%81%88%E3%82%8B%E3%80%8C%E3%81%A7%E3%81%8D%E3%82%8B%E4%BA%BA%E3%80%8D%E3%81%AE%E6%B3%95%E5%89%87-%E3%83%9E%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%83%A3%E3%83%AB-%E3%82%B4%E3%83%BC%E3%83%AB%E3%83%89%E3%82%B9%E3%83%9F%E3%82%B9/dp/4532313562/ref=sr_1_1/378-5425949-3109826?s=books&ie=UTF8&qid=1411022550&sr=1-1)　　日本経済新聞社　　2007年

９　内閣府　小学生・中学生の意識に関する調査報告書　2014年

10　島根県教育センター　学級集団づくり魅力ガイドブック　2014年

11　Dick Prouty Adventure Education Theory and Applications 　　Project Adventure 2007年